

■研究ノート

古代「えみし」の系統的な位置付けとその成立期

女鹿 潤哉 (学芸員)

1 エミシと「えみし」(はじめに)

古代の日本が編纂した歴史書によれば、岩手県を含む東北地方北半から北海道南西部(以下、道南西部と表記)などにかけて、蝦夷などと記された人々が住み、日本の支配にあるいは抵抗し、あるいは服従したとされます。今日の歴史認識では、一般に蝦夷はエミシと読み、先に述べた人々についてもエミシと呼んできています。

しかし、『釈日本紀』『伊呂波字類抄』などの史料から、奈良・平安時代には、蝦夷などの読みは、実はエビスだったことが知られています。一方、『日本書紀』神武天皇即位前紀は、現在の奈良県にあって朝廷側に敵対して討たれた人々を愛彌詩(読みはエミシ)と記しています。また、エミシは、古墳時代末～平安時代前期、毛人や蝦蟇などの用字によって、しばしば人物の名として登場し、それは貴族から庶民、さらに賤民の階層にまでわたっているのです。

エミシは、元来、勇敢なことを意味することばに由来するのに対し、エビスは、日本の支配に従わない東北北半や道南西部などの人々を、野蛮な異民族とみなす差別意識に基づく呼称と考えます。「えみし」に対するエビス認識は、7世紀後半に中国唐の制度にならって誕生する律令国家日本側の中華意識を背景とし、蝦夷の用字と結びつく形で成立したと理解されます。

この小論では、古代の東北北半から道南西部などにわたった在地の人々を「えみし」と記し、エミシ・エビスは「えみし」に対する日本側の呼称や認識を示すものとし、また、およそ、10世紀後半～12世紀(王朝期)を含む中世の「えぞ」とエゾについても書き分けが必要でしょう。

2 「共通文化圏」と「拡大文化圏」

筆者は、本誌No.82(1999年7月)でも述べたように、「えみし」を単に古代史上の問題としてとらえるのではなく、どのよ

うな人々に起源し、歴史的にどのような人々に連なっているのかという系統的な理解が重要だと考えます。

東北北半(特に北部)から道南西部(特に南部)にかけての地域は、ほぼ縄文時代早期～弥生時代中期(およそ9000～2000年前)、土器の様式や道具を始めとする生活・文化の面で、共通性が強い文化圏(以下、共通文化圏と表記)を構成してきました。ところが、弥生時代後期(およそ2000～1700年前)にはいると、東北地方全域には、天王山式土器に伴う文化(以下、天王山文化と表記)が広がります。すると、それまで東北地方の各地にみられた地域的な特色は失われる傾向を示します。

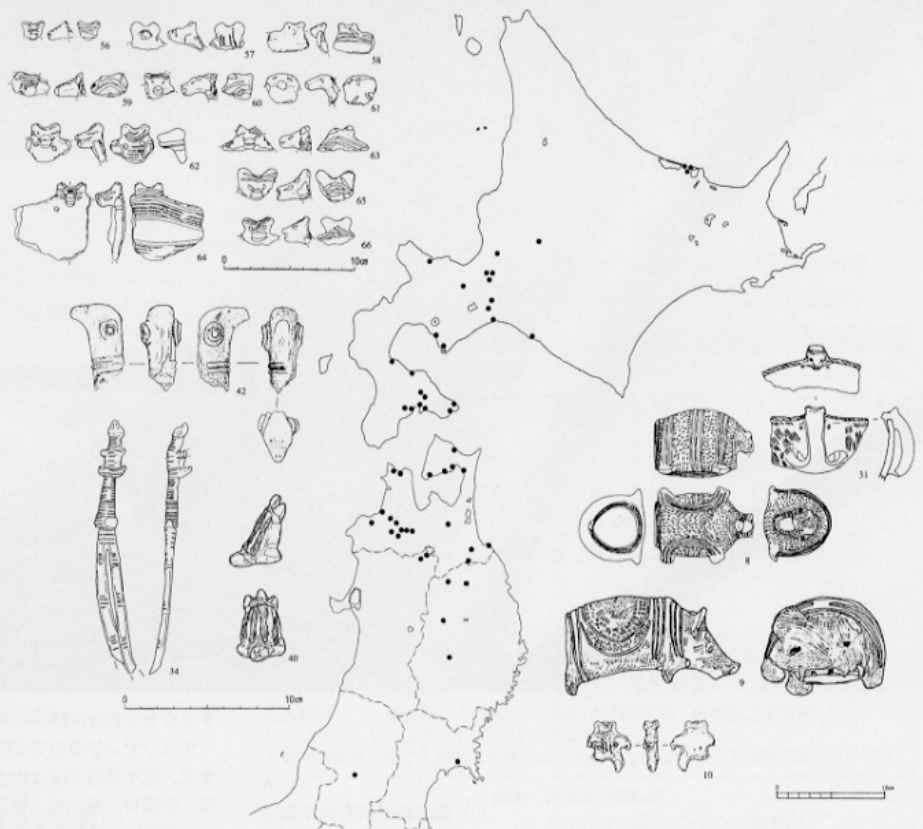
一方、北海道側でも、それにやや遅れて、中央部を中心として用いられていた後北式土器に伴う文化(以下、後北文化と表記)が全道に広がっていきます。それは、後北

C₁式土器の時期から劇的に進行し、それに続く後北C₂-D式土器は、ほぼ全道に拡大します。こうして、東北北半とともに共通文化圏を構成してきた道南西部でも、地域的特色が失われることとなります。

その結果、共通文化圏は、弥生時代後期には解体したと考えられます。それ以前、東北北半や道南西部にみられたクマへの共通の祭祀に伴うとみられるクマの意匠をもつ造形(クマ意匠)も消滅します。こうしたことから、天王山文化や後北文化には、本来、東北地方と北海道とにみられた、いくつかの地域的特色をもつまとまりを、一つの大きな文化圏に再編成するような性格がひそんでいたように思えます。

3 「拡大文化圏」成立の意味

後北文化は、全道を一つの文化圏にまとめるとともに、樺太(サハリン)南部や千



「クマ意匠」出土遺跡 [縄文時代後期～弥生時代(北海道は続縄文時代)中期]
遺物図版左は北海道(佐藤智雄集成)、右は岩手県(日下和寿集成) [ともに東北学院大学民俗学OB会編『東北民俗学研究』第6号より抜粋]

